

今、改めて考える 探究の意義と向き合い方

内容も新たに2022年度に本格導入された「総合的な探究の時間」。初期の熱気が落ち着いたら今、改めて探究の意義や向き合い方について、立命館宇治中学校・高校の酒井淳平先生に伺いました。

酒井先生は、探究に関する著書もあり、探究&キャリア教育について広く発信しています。後半の企業トップとの対談とあわせてご覧ください。

第一部 なぜ今、探究なのか

キーワードに振り回される学校と キーワードを共通言語にする学校

皆さんは、探究もしくは総合的な探究の時間(以下、総探)という言葉が出始めたとき、どのような印象をもたれましたか? 「うちの生徒には難しい」と思った方もいれば、「新たなよくわからない仕事が降ってきた」と気が重かった方もいるでしょう。

私の場合、「またか」と感じてしまいました。かつて見た光景が繰り返されるのではないかと危惧したのです。例えば「キャリア教育」がそうでした。本来、人生をどのように生きる

かという在り方生き方教育であるはずが、「職業講話やインターンシップのことでしょう」と一面的に捉えられ、「忙しくて余裕がない」とか、「うちは進学校だから関係ない」と受け止められてしまったのです。アクティブ・ラーニングも同様、表面的な「型」と誤解されてしまい、その後「主体的・対話的で深い学び」に言い換えられた経緯があります。

探究もまた、ブームのように広まることで、本質を理解せず、単なる調べ学習で終わったり、教員が介入しすぎ、肝心の生徒が置いていかれたりするのではないかと思いますし、実際、そのようなケースも多いでしょう。

／ お話を伺った方 ／

立命館宇治中学校・高校
酒井淳平先生

立命館中学校・高校を経て、2008年立命館宇治中学校・高校に異動し、キャリア教育部を立ち上げる。2018年度文部科学省研究開発学校、2019年度同WWLの指定を受け、探究×キャリア教育を核とした「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発に尽力。著書に『高等学校 新学習指導要領 数学の授業づくり』『探究的な学びデザイン』(明治図書)など(左ページ参照)。



取材・文／堀水潤一 イラスト／松田奈津留

このように新たな施策や流行りのキーワードに振り回されることがある一方で、キーワードを自分たちの学校にマッチしたものと読み替え、校内の共通言語にして授業改善やさまざまな実践に取り組み、教育力を向上させている学校もあります。この差はどこで生じるのでしょうか。そんなことを念頭に、改めて現場目線で探究について考えたいと思います。



多くの課題を抱える社会だが
若者が活躍する機会も確実に増加

なぜ今、探究なのでしょう。新しい学習指導要領の根幹にあるのは、生徒観・学力観の転換です。生徒を教育の対象としてではなく、学びの主体へと転換する。与えられた問題に受動的に取り組むのではなく、学びのオーナーシップを生徒がもつ。大切なことは生徒を、サービスを受ける「お客様」ではなく、自ら価値を生み出す「生産者」へと育てることだと私は思っています。

大学に入学してから学力観を転換すれば間に合った時代もあったかもしれませんが、今の大学生はするべきことが多く、就職活動に取り組む時期も早まっています。また、高校卒業後、すぐに社会に出る生徒もいます。人材教育にかかる余裕がない企業が多いことも踏まえると、高校段階から自ら

サービスを受ける「お客様」ではなく、
自ら価値を生み出す「生産者」に

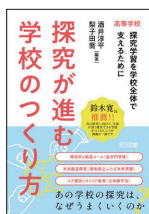
課題を発見し、解決に向かう力を鍛えることは大切です。

そうした力は、どこで育つのか。カリキュラム全体を通して、とは思いますが、軸となるのはやはり、学習指導要領の目標に「よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成する」という一文のある総探においてでしょう。関心のある課題について、情報を集め、さまざまな体験を通じて整理・分析し、他者とも関わりながら自分なりにまとめ、表現するという一連の学習プロセスは、レポートやゼミ活動を中心とした大学での学びと親和性があるばかりではなく、社会で必要な力そのものだと思います。



『探究的な学びデザイン』
酒井淳平著 (明治図書)

なぜ今「探究」が必要なのか。押さえておきたいポイントや落とし穴など、探究の進め方を現場の視点で解説。全国10校の実践事例も掲載。



『探究が進む学校のつくり方』
酒井淳平 梨子田 喬編著 (明治図書)

探究の推進には教員個人だけではなく、学校組織としてどう向き合うかが重要という視点で、マインドセットから体制づくりまで事例を含めて解説。

今の社会はさまざまな課題を抱えてはいますが、一方で、若い人が活躍する機会が増えています。十数年前であれば、高校生が起業したり、学会で発表したりはもちろん、企業や地域を巻き込んで実際のプロジェクトを進めることさえ珍しいことでした。総探は、そうした一歩を踏み出す機会になるはずですよ。

第2部 探究の落とし穴

管理、指導するという
マインドセットからの転換を

西大和学園中学校・高校の梨子田 喬先生（元岩手県立大船渡高校）は、私の共著『探究が進む学校のつくり方』において、教員のマインドセットについて次のように書いています。

——教員のマインドセットには、星の王子さまの「実業家」のような生真面目さがあります。①全員が同じようなことを、同じように取り組んで、同じような到達度に至らないといけないとか、②先生が全員の学びを管理し、アドバイスを通して答えのようなものを生徒に落とさなくてはいけないとか、



図1 「総探」と他教科・科目における探究の違い

総合的な探究の時間で行われる探究は、基本的に以下の三つの点において他教科・科目において行われる探究と異なっている。一つは、この時間の学習の対象や領域は、特定の教科・科目等に留まらず、横断的・総合的な点である。総合的な探究の時間は、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する事象を対象としている。二つは、複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて探究するという点である。他の探究が、他教科・科目における理解をより深めることを目的に行われていることに対し、総合的な探究の時間では、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する問題を様々な角度から俯瞰して捉え、考えていく。そして三つは、この時間における学習活動が、解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題に対して、最適解や納得解を見いだすことを重視しているという点である。（『高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編』より。下線は編集部）

③生徒にはきちんと成果を出させ、成果が出ない生徒には指導を加えなくてはいけないとか、④公平公正客観的に全員を評価すべきとか、挙げればきりがありません。（数字は編集部）

ただ、こうしたマインドセットを変えることは容易ではありません。私自身、数学の授業で「このクラスは、このままではまずいな」と不安なときほど、②や③のようなマインドに陥り、生徒に考えさせようとはせず、一方向のレクチャーが増えてしまいます。その結果、生徒がより理解できなくなるといふ悪循環に陥ってしまうのです。

その点、「教員はこうあるべき」という思い込みから脱却しやすいのが総探

ではないでしょうか。そもそも総探は、教科の専門性が役に立つとは限りません。本校でも数学関連の課題を設定する生徒は少ないため、私のような数学の教員にとつては専門外のテーマばかりです。知識がないだけに「伴走」するしかありません。ただ、知識がないことで生徒と一緒に考え、素朴な疑問を投げかけたり、必要に応じてその分野に詳しい人を紹介したりしようとできているのかもしれない。また、生徒に教えるようにすることもなく、

見栄えではなく探究の質を重視。

生徒の成長という成功体験が原動力に

図2 立命館宇治中学校・高校での実践

「問いを立てる授業」の素材として 教員が語る「その教科を学ぶ意味」

同 校では、「お客様から生産者へ」をキャッチフレーズに、自ら価値を生み出す人になるべく3年間かけてマイテーマを深める「コア探究」というカリキュラムを実施。その導入として1年次に実施するのが「問いを立てる」という単元だ。生徒は、問いを解くことはあっても、問いを立てることに慣れていない。例えば講演会の質疑応答で手を挙げる生徒は多くない。そこで、何らかのコンテンツを受講したあと、質問を考えたいうえで、質問に優先順位をつけるといったグループワークを実施。コンテンツ自体は何でもいなかで、毎年実施しているのが、「教員が語る教科を学ぶ意味」というプレゼンだ。酒井先生の場合、「数学は最もグローバルな言語であること」「古今東西の数学者の夢の集まりであること」「暗号や生成AIなど数学抜きで現代社会は成り立たないこと」などを語る。あくまで狙いは、問いを立てる力の育成だが、教員自身が改めて教科に向き合い、生徒に思いを伝える良い機会になっている。しかも、事前に教員同士で予行演習をすることで、他教科の見方・考え方に触れられるうえ、「この人、こんな熱い思いをもっていたのか」などチーム感の醸成にもつながっている。

生徒の思考の深まりを共に楽しめるようになっていくかもしれません。

総探はまた、思わぬ形で生徒の成長に立ち会わせてもらえます。梨子田先生も先の文章に続き、③や④を念頭にこんなエピソードを紹介しています。

——以前、貼られた白紙のポスターを前に苦笑いしながら「間に合わなかったんで」と言って20分も熱弁を振るっている生徒がいました。カラフルなポスターの前でよく準備された原稿を読んでいる生徒の発表より、はるかに探究の質が高かったです。また、「結局うまくできませんでした」という発表

をした生徒もいました。しかし、その試行錯誤の過程は論理的で筋が通っており、内容にも人を唸らせるものがありました。成果がなくても十分探究の深さを感じることができました。

このエピソードに共感する先生は多いのではないのでしょうか。発表会はいくまで、次のステップに進むきっかけを与えてくれる場所。確かに、見栄えのいい発表やコンテンツでの受賞といった成果も素晴らしいですが、それ以上に、予想を超えた生徒の成長と喜ぶ先生が多いでしょう。生徒の成長こそ教員の一番の成功体験。「こうあ

図3 義務教育段階での探究実践と高校との連携

京都府宇治市立黄檗中学校(宇治黄檗学園)

宇 治黄檗学園は、小1から中3までが同じ校舎で過ごす公立の小中一貫校。令和元年に京都府教育委員会による「未来の担い手育成プログラム」の研究指定を受け、総合的な学習の時間を中心に、7年生は防災、8年生は企業連携、9年生は宇治市への提言という流れで課題解決型学習に取り組む。連携企業から受けた課題は「世界中に日本茶を広めるにはどうすればよいか」というもの。当初の心配をよそに生徒のなかに「自分たちで課題を何とかしたい」という当事者意識や主体性が芽生えるなど、担任が驚くような成長を見せる。一方で、中学生では行動範囲が限定されるという課題や、取り組んでいる学習が高校、大学、社会へどうつながるかイメージさせたいという新たな思いが生じ、立命館宇治高校との協働学習が実現。互いのプロジェクトを発表し、意見を交換しあった。中学生からは、「高校生は課題を自分たちで見つけアクションを起こしているところがすごい」「3年後の自分の姿をイメージできた」という感想が、高校生からは「斬新なアイデアが多く刺激になった」という感想があがった。

るべき」というマインドセットから転換する何よりの近道です。

教科の魅力伝え、発問を変える
ことで日常の授業が探究的に

現行学習指導要領では、「総探」に加え、「理数探究」や「古典探究」「地理探究」などの新科目が設置されています。総探とそれらの違いは学習指導要領解説に譲るとして(図1)、個人的には、探究を進めるうえで、特別活動(ホームルーム、生徒会、学校行事)や課外活動も大切だと考えま

す。例えば、クラスで文化祭の企画を決める際、この集団で、いかにいいものを生むか、そこに自分の役割をどう見だし、合意形成しながら納得解を導くかといったことは、探究そのものだと思います。ただ、総探も含め限られたコマ数や放課後の活動だけで真の力がつくわけがありません。としたとき大切なのは日々の授業です。

そもそも今ある学問は、先人の探究の成果の蓄積です。教員は、その学問や教科に魅力を感じて教職に就いたわけなので、そうした思いを語る

だけでも、授業に探究の要素が入るのではないのでしょうか。(図2も参照)。

教科の授業を探究的にする
と、大事に聞かれますが、発問一つで

変わることを教えてくれたのは授業名人として知られる教育学者の故 有田和正先生です。有田先生は小学校の社会の授業で「バスの運転手さんは、どんな仕事をしていますか？」ではなく、「バスの運転手さんは、どこを見て運転していますか？」と児童に尋ねました。前者の場合、「バスの運転」とスレートに答えがちですが、後者のような発問になると、運転手さんが日々行っている業務について、頭の中であれこれと思考を巡らせることになります。

高校にいくと、こうした小・中学校の実践は見えづらものです。義務教育段階においても総合的な学習の時間の長い蓄積によって、これまでと異なる児童や生徒の姿があります。ひと昔前であればグループワークにも慣れていなかった中学生が今は堂々とプレゼンテーションを行うことも。私の勤務校の近隣にも先進的な実践をしている中学校がいくつもあり、そこから学べることは少なくありません(図3)。地域にある中学校の取組を踏まえ、高校はそれをどう受け止めるか。探究という言葉を共通言語に、より良い学校間連携を深める機会だと思えます。

第3部 探究の組織論

探究を活用して学校を変える。
キャリア教育はその切り口に

良くも悪くも国を挙げて「探究」を合言葉にしているわけですから、探究を共通言語として、それぞれの実情にあわせて学校を変えるチャンスだとも思います。私自身は、2017年度に校内のカリキュラムを変える際、カリキュラム委員会で交わした「最近の生徒は真面目で素直だけど、受け身になつてないか。問題意識をもつて、自分から動き人生を切り開けるようなマインドやスキルを育てたい」という議論を受け、私自身のライフワークでもあるキャリア教育の要素を総探の核として取り込むことにしました。

そもそも総探は、学習指導要領の目標に「自己の在り方生き方を考えながら」とあり、解説においても「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し」とあるなど、キャリア教育と切り離せないものです。そこで「本校の総探はキャリア教育の視点を重視して取り組む」と決意。メンバーの理解を得たうえでカリキュラムを設計しました。思いを載せることなく「総探の担当になったから仕方なく」という受け身のマインドだったとしたら疲弊しか生じなかったでしょう。

大切なのはHOW(どのようにするか)ではなく、WHY(なぜするのか)

そうならないためにも、取組に際して3つの質問を自分なりに考えてみてはどうでしょうか。①「学習指導要領ではなぜ探究を重視しているのでしょうか」②「あなたの学校ではなぜ探究に取り組むのでしょうか」③「あなた自身は探究についてどう思いますか」

組織人として②を正しく理解することは必要ですが、それだけではやらされ感が生じかねません。②がMUSTだとしたら、③はWILL。「自分はこうしたい」という意志は欠かせません。もちろん公教育を担う以上、社会全体を視野に入れる必要があります、それが①の理解です。個人の思いと学校の狙いが重なる部分をいかに広げるか。それもまた教員の探究課題になる気がします。

冒頭に投げかけた「流行りのキーワードに振り回される学校と、キーワードを共通言語にして教育力を向上させる学校の差はどこで生じるか」に対する私なりの答えは、なぜそれをするのかという本質から考え、共有できているかどうかの差だと思えます。WHY(なぜするのか)が忘れられ、

HOW(どのようにするか)ばかりが目が行く学校の違いと言ってもいいでしょう。「何のために探究をするのか」。この哲学をもち共有することが取組を成功させる鍵だと思えます。

「より良い授業づくり」こそ 教員にとって最大の探究課題

先に「生徒を学びの主体へと転換する」「学びのオーナーシップを生徒に」とも述べましたが、学ぶのは生徒だけではありません。教員も探究し続ける必要があるはずで、教員にとっての永遠のテーマは「より良い授業づくり」でしょう。そのためには知識や技能だけでは足りません。仮説を立て、検証し、改善する。行きつ戻りつしながらも探究サイクルを回し続けることです。

より良い授業をつくらうと思うと、その根拠として「なぜこの教科を生徒は学ぶのか」という本質をついた問いが必要で、そうやって教員が探究している、同じように探究している仲間が全国にいることに気づき、力が湧いてきます。それもまた探究を進める原動力になるでしょう。

Let's Try

Point

- HOWの前に、まずWHYを大切に
- 「～しなければ」ではなく「～できたらいいな」と考えてはどうでしょう
- 同僚の先生は、どのような考えをおもちでしょうか

Q

1 学習指導要領ではなぜ探究を重視しているのでしょうか？

Q

2 あなたの学校ではなぜ探究に取り組むのでしょうか？

Q

3 あなた自身は探究についてどう思いますか？
